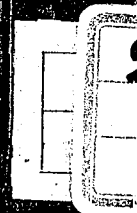


291
55

河井
立齋
熊野紀行



中根七郎正吉

[illegible]



京都市上东区紫野石鼓所立

限不十四月

中
根
樁

462

[illegible]



京都市上东区紫雲石龍沙丸
中根七郎様

一萬四千五百五十五

宇井縫藏

大阪府豊能郡南豊島村原田阪急住宅地

中
根
樣

[illegible]

目錄
終記 行程

三月九日	住吉	濱寺	貝塚
三月九日	鶴岡	湊	岡田
三月十日	田井	和歌山	明井
三月十一日	和歌山	紀伊郡	龍白
三月十二日	道持		
三月十三日	和歌山	石谷	
三月十四日	道持	印南	
三月十五日	印南	堺	芳善
三月十六日	道持	南郡	田辺
三月十七日	道持	芝村	
三月十八日	道持	本宮	
三月十九日	本宮	新宮	神倉山
三月二十日	本宮	新宮	新宮
三月二十一日	本宮	新宮	新宮
三月二十二日	本宮	新宮	新宮
三月二十三日	本宮	新宮	新宮
三月二十四日	本宮	新宮	新宮
三月二十五日	本宮	新宮	新宮
三月二十六日	本宮	新宮	新宮
三月二十七日	本宮	新宮	新宮
三月二十八日	本宮	新宮	新宮
三月二十九日	本宮	新宮	新宮
三月三十日	本宮	新宮	新宮

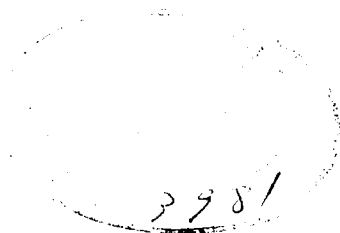
291

55

1

河井

無雙記



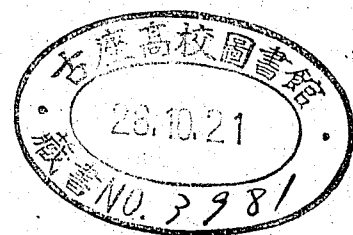
昔の月日林陰集、無雙記の二冊

昭和四年十二月十九日

四月三日	妙法山	大雪本	桐宮
四月四日	山口	大雪本	湯山
四月五日	三軒	山口	大幡
四月六日	湯左	大雪本	大幡
四月七日	上三軒	山口	大幡
四月八日	湯左	大雪本	大幡
四月九日	芳春	山口	大幡
四月十日	千屋	大雪本	大幡
四月十一日	上三軒	山口	大幡
四月十二日	湯左	大雪本	大幡
四月十三日	芳春	山口	大幡
四月十四日	千屋	大雪本	大幡
四月十五日	上三軒	山口	大幡
四月十六日	湯左	大雪本	大幡
四月十七日	芳春	山口	大幡
四月十八日	千屋	大雪本	大幡
四月十九日	上三軒	山口	大幡
四月二十日	湯左	大雪本	大幡
四月二十一日	芳春	山口	大幡
四月二十二日	千屋	大雪本	大幡
四月二十三日	上三軒	山口	大幡
四月二十四日	湯左	大雪本	大幡
四月二十五日	芳春	山口	大幡
四月二十六日	千屋	大雪本	大幡
四月二十七日	上三軒	山口	大幡
四月二十八日	湯左	大雪本	大幡
四月二十九日	芳春	山口	大幡
四月三十日	千屋	大雪本	大幡

291
55
1

河井
熊登
記



無雙記行

難波となり年頃する翁ありけり世の海を渡るわさも物う
しとあらぬもくすのみかきあから名ととめんとてあらすま
いそ人も見せずおのかはまかせつれとさる入きたりもとめ
つらん人もあていたつら如くて身をこれからとくらみむ
はともあへて世をすてん心もあらぬはやく末のほたいを
とらん思ひもあへて世を厭ふ心はや名を不圖といひけり
何事も聞あつからぬ心をへし世をからわかに似たる
友とちのたまへにまよりきつて波間下をむくのきか
中にも心をなくさめ死に紅葉にうとき浦のとまをるにお

きふ—とあるぬ月日はかきぬつ—にかあしけん同—畢す
める信草とある人のきとらあやう和歌のうらにひらあふ
ものみちうかあ—とある堀墓法師とやらんはらのまにあら
むと思ひて世の中はかきぬつ—にかあしけん同—畢す
ありたふとある所んをあるきりて身のしみをなりはたせといふ
るはたらかぬと思ひ給ふるものかきぬつ—にかあしけん同—畢す
おとろかされてあるものかきぬつ—にかあしけん同—畢す
かたのみねのまつれる人の母のきみのきみのきみのきみのきみの
きたひまかるあつきのあつきのあつきのあつきのあつきのあつきの
かきぬつ—にかあしけん同—畢す

(後十一號)

て世の中はかきぬつ—にかあしけん同—畢す
所とあるものかきぬつ—にかあしけん同—畢す
頃もまつれる人の母のきみのきみのきみのきみのきみのきみの
れは、かきぬつ—にかあしけん同—畢す
かたうれば、かきぬつ—にかあしけん同—畢す
—とはあつきのあつきのあつきのあつきのあつきのあつきの
ままかきぬつ—にかあしけん同—畢す
かきぬつ—にかあしけん同—畢す
えすすれは、かきぬつ—にかあしけん同—畢す
あつきのあつきのあつきのあつきのあつきのあつきのあつきの

二

住者

物しけれはいるみの世なあらじやめみはらけうの世中の
清水そのふさはふへにしらばとてあはた——うすめよう
あつめを——とていのちもいづれに——かたすなへたすめ
のみとりもたせて出たつ路を通る中につうへ日とておに
かれにえらばあひいじ難波のちとをあらわすうはめ——の世
ぬけきつて

うらまはしめうのうらまはせうはうまき松屋あつて
見えてまはる人あらあつたははちひのうらちちへ——し
やすらひて別れけがけきとすめる親がし——のあつ

住者——のめのおもへにわかれはとてかへるあつた

(旅印十一號)

住者

親が——のあつてける近衛尼がし
旅衣袖のあつてけるあつたにからはまかへうん
かくいひかはすほどに時ふううううううううううう
契りおくちひの日ははるあつた草のなとてうううう
演寺といふおはらま

住者

うらまはしめうのうらまはせうはうまき松屋あつて
甚りな見ゆといふあつた

住者

十九日みえに鶴はらるううあつたすくううううううう
まて——うううううううううううううううううう
みえとてうううううううううううううううううう

住者

岡田村

岡田村を運ぶとて

あやうはちの末にほのみえとあはなるか出るつり舟
お祈心ながら

村郭相連壑井東 ありおぬ海送る風

長隈随安子帆出 阿淡道分一里中

不気井と云

吹飯のうらまて

こがはひる川の浦に鳴たつのもまづれと世にも笑えす

田川

廿日夜とあるて田川の石を立

池水もやとれる月のたねに旅ねの床をおき出てゆく 信孝

(旅甲十一巻)

若山

その日わか山たもとをさためふるやとにメのかはすおんた
見あつる記ちの遠山城ふはそとを旅ねのかたむしらす

廿日吹上の濱を過るのうらまて

和歌海

旅ねを過にんつもまゐりまへたてゆく和歌のうらまて 延樹

まかへり又も旅ねはん和歌のうらまて 信孝

ころにおもふ事さかきへ

と林かき
孝

こかの國を旅ねあむものみかくれて廿日とらぬ旅ねのうらまて
もし旅ねかくてくちあんと計るうらまて 延島山

西津しまの宮なぬかひまて

あゝの波あけて今に旅ねぬみかへるのまはしき山

三

春ふかくあはうすき頃なり先をぬき玉島山 所附
けふこゝ和歌のうら懐かけて終るをさふさふなさい 信章
奉細の心を

波よす玉津しまねに海をけし 神の光そふ世にふね
通しちる直をへうもよしの便の神せすいひ玉津しまね 近所
およするはなかなても 玉津島世に光そふとあうら 同
雲の空とわらふむかへに任物ふよあつては衆人のうらなりんし
おちちやふもをとの置けんとおみ給ふ所まで今は重きあてをた
とけり 毫も差をきり舟のりてあまのいね玉津島たよりてり
金剛宮といひかへは玉津島山落お寺といふむかへより本寺より手

玉津島

(旅甲十一號)

観音はいますまて十一面観音は岡山光上人の作ありと云ふ山に三の
法水ありおの流を清浄水といひて柳楊水といひて此を玉津水
といふ三の流あるゆゑ玉津山といふく光上人は唐の僧にてつね
に観音を信じておゑ 秘徳帝の御宇と云ひ給ひ御地をさへ得て
とあり給ふ光仁帝の御宇中下建まあり十一面観音を安置す左に
天照皇日二神の像をおけり(たゞていふ神佛の面人の見の事を語り
給はすゆゑを)世を運ぶといふも御事をいふ事をするすむかし
光上人の山に住給ふとき部女よりて水取にむかへたり玉津
山と云ふ給ふ玉津錫杖橋道標をそれゆゑをさへてなり給ふて
その如く海畔より出たり人々の思ををしりあけんとすれりうか

五

寺あり 岩くら山を渡りたけき岩の「うり」たひてあつきの岩
引りたる下は道あるとつたひて行

流れよの世はもよそ何れは恨の涙のちよのこす人
の傍のまよふと雨のちよを待ほよちかてはれたりと
あしとめおし給へるいふはこととすりぬ

たみぬ雨の雨を思ふかこさ道に記しぬてす
和高信孝に二句をのそよれぬ

春雨のめくみよこましろ日かか 化就

宿道村善寺和高見直信孝 同答謝

宜ふおれ一番基 何科因縁此迄来

(庚申十一號)

且喜衣珠照建路 三山雪霜の界開

廿三日善寺とま出たかくおる

雨はぬれぬはちよあて又の 雨のちよあては 花折

斜麻山にて

いと山いゝ 強波もたぬはちよあては 信孝

原石といふ所はいたる 杜若のちよあては

原石のこかくれは 咲る杜若のちよあては 人

この原谷たに ちよあては ちよあては 雨のちよあては
のほろ 魔沙にさすの時より人あからす 山いゝ 木ま物ふり
この葉ふかく ちよあては ちよあては 水穴風穴とて

小ねをうち入れば風いづり吹出雨いたるよとて里人おそれてちかつ
かす水穴に雨を初れなまはめてしるしありとて

洛上雨司玉子峯 千年草表二株松

峰嶽お空窓洞前立 祈雨呼凡人耆耆

廿四日おふち出やくわめて世阿弥かゝる雉子鳴ゆれは

子とあまのききすきおとほしにけあけの母き恵き信音十

道成寺にまゐるきしより世阿弥おまゐるといふと

海の花のちのきあはてし三井は雪の海の奥のなれ

縁起をよみてけかきおとほしにけあけの日とてわたりて

ちりく——てあまのききすき

廿五日いふちのお古き木はわけてけきけりおとほしにけあけ

あまのききすきいふちのけあけの根さす二木をわけて

海の花を文はかりておとほしにけあけの海の花は

日教ふる海の花のけあけの海の花は

おとほしにけあけの海の花は

おとほしにけあけの海の花は

堺うらな海舟のちの海は

うらな海舟のちの海は

はや浦にて

山教ふる海の花のけあけの海の花は

旅のうさぎお節人のかたまりの無きさあけりな水の音 信長
 廿七日十太峠あふさか峠をいふけはき山坂をこえて
 くらでりまのまこりやみまの杉の木の下で意のあく
 孫の死のいとおほく嘆かたりた

五川のあやれはねこまててもあせぬまのぼろあかぬ
 けふはなつたれぬまを望中といふちをりす

廿日夫婦坂湯川みづの原をうちこえて本宮あつた

廿九日本宮にまゐり

三徳堂の神のいかにえぬれをきりしのかしらし 近
 け神のめくみまをみまをきりしのかしらし 信長

(海印十一號)

御社に二十餘り九年のまじりて今はお宮にまゐりし
 と坊より御信を奉ればかり殿のうちにまゐりし
 日にかさね山のいづれをきりしのかしらし 近
 鳥居を出れば高橋とてありきりしのかしらし 近
 川ありきりしのかしらし 三の川は御信を奉ればかり殿のうちにまゐりし
 五舟にまゐりしのかしらし 左の岸のきりしのかしらし 右の岸のきりしのかしらし
 かきあてめくみまをきりしのかしらし

已取三川 急流舟若松
 山々 檣上錦 百里一時過
 御舟島をいいて

二

新吉

神倉

神代を偲び

山崎のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 ほろろ新吉の海より舟よりあはれとてお世のあはれ
 つのふのたよりあはれとてお世のあはれ
 山崎のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 建ち入て宮をなすはなはな海傍新吉の城あり二回に見おろ
 一と見おろしをへんかたなり一欄干ありて人々あはれおたりたれども
 無きけりてさるの時より人のほろろとていかにうく
 お梅も生をなす
 金尊殿跡依を在
 系世仍留上古凡
 人の世よりうきぬれを思ふは海ありてお世のあはれ

(寛印十一號)

新大、新作

舟所迄も白
じかりし新
下れは、同
元正

新吉にまじり、島はふりてお世のあはれ
 それより、本社にまじりてお世のあはれ
 舟分、お梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 さきより、お梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 さきより、お梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 天くたつてお梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 お梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 草枕むすむお梅のふかれのまの待せ島とてお世のあはれ
 三月のころを

三

徐福

暮の一日おをせむ春をうらむとみゆめのおく 延野
あれて一夜の夢も別れ夢に思ふすめにおもくらせん 信孝
三十日雨あめふんゆをもちて徐福の墓を尋ぬ

昔年徐福入蓬萊 仙侶お獲の返あふ外

一山雪帰去後 荒碑墨を没英苔

ふとふとふと一人の夢をたのしむ海をえすむあけの 信孝
あたる木をまきけりてお碑のたたりまうしるふに思ふ夢をせうち
つきてひてお碑よりふりまはる人なはかたしと人かたうらふ
田の中をたしるしの木しげれりあふあはれは見かりてお鳥を
まうしるふとふたはる言はるきそれよりみたらし三つあうくおをせむ

(紙印十一號)

海客

いふ所を過つて海の宮をちあきほやうに田鶴のたてふと見て

雨あふのはれ間をぬき浦鶴は海のおたふ代も佐らん 延野

八百口や海のおおのたふす代をたふぬ鶴の毛衣修多

海のお浦鶴をたふすう雨あふきまたたきうて那智の山のほうちやう

雨あふをたふて海へんとて出やう

雨あふをたふすきまたたきうて海へんとて出やう

八百口や海のおおのたふす代をたふぬ鶴の毛衣修多

海のお浦鶴をたふすう雨あふきまたたきうて那智の山のほうちやう

雨あふをたふて海へんとて出やう

那智碓氷 不易亭

積島新田 村松

三

海客
海客
海客

海客

(旗印十一號)

一

日本第一大鹽鹼所
熊本鹽池三所所現

何人爲託獻者

唱出扶桑第一聲

坊は如くして事流のわがひのかうしとともにもちひて坊のころは
 ゑうちのかたらひのみわらはに山の事と云にけふえあや
 き事ありに里のものとたりてらる御坐にけふえあやにけしからぬもの
 おとすそのかたを尋ぬなまねの枝の折たるやけり朽たる枝にはあら
 すとつけぬかゝる事やし首つれなまはめて事あらんかしとをかなる
 まの夜坊の中の人々をうり行のふさまかり何そと問すればはなは

(旗印十一號)

一五

初日雨あらず同し坊にありてあなの日とくらんとほひく
あつく暑とあつうたふら

初あ

延 柳

まよふたあめりあなふくまをいれしひのあつう

山 橋

信 子

ひのはし長閑にあひまする日あなをいれしひのあつう

都 合

主 女

時鳥とあひまのさやあなをいれしひのあつう

萩 花

同

咲そへは枝あけけしあなをいれしひのあつう

(旅四十一號)

上二カ
まき一カ

山橋
まき一カ

山橋
まき一カ

又 鹿

信 子

湖...をいれしひのあつう

形 雪

同

時雨は難面ええ...のあつう

連 雲

主 女

思はすもあはす夜床の手枕...のあつう

別 意

延 柳

ねの戸を夜ふけく出るわかれ...のあつう

山 家

同

し...のあつう

述懐

ゆく来と思ふも寝みくもの、浅き心はちけしのため
更衣の日されは、

花すりのころは日あすもあけぬと、
二日音二ちより、雨すくし晴ぬな、めづかしきまゝにぬ、

礎つむ行舟の音もあけぬ、めづかしきまゝにぬ、

三日や、はれたるもあけぬ、めづかしきまゝにぬ、
こゝろにたづねあけぬ、めづかしきまゝにぬ、
聞ふも、

くまの歌、まわかるもあけぬ、めづかしきまゝにぬ、

(後四十一號)

大空取坂にて、雲を見かへりて、

あちの山、雲もなごり、あちの山、雲もなごり、

雨よりぬき、雲もあけぬ、

雲ぬれ、こゝろもあけぬ、雨もあけぬ、

くひすのなごり、めづかしきまゝにぬ、

夏あけ、あちの雲もあけぬ、めづかしきまゝにぬ、

又、あちの雨もあけぬ、

四月、杜鵑あけぬ、杜鵑あけぬ、

行人あけぬ、行人あけぬ、

そ、夜は、あちの雲もあけぬ、

小川

あけの神にしめしなれぬす枕の山三日の雨

四日糸小口川をわたる

笠置の辞客金

路轉の雨声金

朝見の山子峰

霧鳴の山霧傍

崖無苔を懐

渡口呼舟子

葉密曙煙重

小雲取坂をこゆるに卯花をかりてせみの鳴

みくわのいなきかきまぬの山路にあらうの花と見つ

山屋はまたあふる中又あふるのちもきぬとわすれたるに

湯の峰にちどるこは出湯のありて諸山よりの湯あはる人あは

(旅四十一號)

小雲

小雲

湯の峰

二部

小雲

小川

大雲

くさしたる山に雨の音にふりてあけの山に雨あはる

五日みくわの山に雨あはる

山頂にのみあはる雨の音にふりてあけの山に雨あはる

初川にふりてあけの山に雨あはる

ふせはみくわの山に雨あはる

夫婦坂をふりてあけの山に雨あはる

ふく狂歌

はんそるめとてあけの山に雨あはる

夕れ道いそぐに郭公のあはる

二

小倉城

ゆきくれ一松のあはれとあてあて一青く山ほとり 延樹
小倉城とふ所にて 郭公あまたひ鳴けりな

旅衣雨ぬれ一うきもやあはれとあてあて時鳥 信章

壁中持ちやうあはれとあてあて時鳥をきいて

よみほもの雨ぬれ一時鳥あてあての雪ふり一に

近海川をさし大坂峠十丈峠をさし芝村にやと

芝村煙雨更濤々 洞水涓々西後東

獨木柳迎人不見 青山蒼翠望中空

雲のとふをえて

夏はまた浅き夏の夜にやあはれとあてあて

(旅印十一號)

世村

ふるさとを出て一春をきく雨にやあはれとあてあて 延樹

七日糸雨しりて

新掛茶煮くわ徑斜 炊煙晴見あ三家

夜半風急子峰雨 吹簾林樹滿梨花

主出ぬとあてあて雨あはれ見味にて

南の山麓の隙 夏遇雨兼風

煙霧如茶煮城 觀像名不空

やうからうと上三極村にやとあてあて

水の音を雨の音とあてあてす橋ねの床をいり物しき

雲のしりしりふと見え

上三極

雨すぢふはに雲のかはあれと星の光はみすの川渡
八日泉やうく晴間見えけりは

三栖お畔雨初晴 日出雪飛山を生
觸石潺々溪水咽 穿心難処と建鶴鳴

雨後至三栖川多橋因賦

難御旬日紀事隅 兼岳子山入ある

一夜三栖風雨甚 前川渺々深窮途

廿日は一日はれぬと出やうと歌ふむ

山 新樹 近樹

旅人の己けやうかたやまふ人あまたしうの深山路

(旅甲十一號)

田家早苗

同

けふははや門田のけふの時きぬとてへるるにきし

里 卯花 之 高

るふからよそあもすし卯花の雪にまれる山陰のやと

初園部公 信 章

かねても待しよ二りの時鳥しのひききからこふむらしつ

丑月雨晴 同

此れのかさる雪もかりありけふははれす昔雨のやう

河 夏月 立 高

夏川や清き便にやまましありとほええずあくる月影

二

夏草 近所
 朝霞もどけり／＼柳にそよ風あつて夏草のあつたけけ
 水はきき川のあつたけけ／＼あつたけけ／＼
 あまたあり／＼と／＼と／＼と／＼と
 九日三橋川に出ぬ／＼と／＼と／＼と／＼と
 のみ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 る／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 おかえ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 田を／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

けふにはも浦にたいて／＼と／＼と／＼と／＼と
 南部の浦にたいて／＼と／＼と／＼と／＼と
 秋衣のすぬ日／＼と／＼と／＼と／＼と
 みる／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 十日／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 刈妻の田／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 子／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 思ひ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 人／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 ち／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

長閑

三施に又もきて見ん笑ひも独ふ名ゆかし若代の松
ふちに世中の清水あれば
まよふとを討たいるみの世中の清水汲人もあ
そにやどりて

旅飯常園陀世意

あけ吹雨更青條

宸魂空断山盡曉

獨向跡燈夢又清

十日山松東を過かてに

おの名を穿ちしため山松東をかりて
あまのまよふとを討たいるみの世中の清水汲人もあ
そにやどりて

山川の若まの木に花散りては流るる水のすく——

(後四十一)

長閑

長閑

長閑

長閑

長閑

夏草のしけみかくれ下ゆく水のまゝと知らせて雲霧あふ
十三日海の岩山をこゆひに雨をたふしあふ

たひ衣をかはるまてぬれたすく海の岩山を雨たふして

陽候といふに

微雨青々落日沈

蓬舟湯壺漿向江清

啼鵲帰尽成山暮

玉女祠前樹分陰

十三日雨はぬく見えければ

津頭雨歇樹烟晴

朝霧は来海面清

陽候人あまなる岸

山々翠色滿江城

いとか山よりて雨またしきりよきり

三

其坂
句集

袖ぬれてけふさき雨の山の名はいく雨の跡のあらと
かふ坂にて

重登蘆坂鳥影稀 半路雪連雨脚飛

幽洞深く穿れ径 行人汲水縛沾衣

雨のはれき見えて標さくかけをぐ

あめはれて日の中娘なるぬれ袖かすすあまの夜の下道

かくいひつ夢坂の山鏡にいたれば雨もよぶはれて雲のけしき
いよしごと白糸山といふ

桑 店作

山路登々石角重 山品頸構店倚長柄

(庚申十一號)

其坂
句集

二砂六島眸中所 ちや海觀浪をけ峰

待所のまといふのは白河院無量行幸の時しほし結屋あり
けるところにて地形並のころものほろまたのき山にこのあまを
結せり

眺 昔行宮地 猶條一面芝

眺 臨多勝聚 落日帶山奇

孫白の御殿こゆれは海見えるがや溪路の山 信章

王子の宮ちかきもとやとりしかりをといて一夜を明す曉かた月
を見て

月ほゆる入飯の山しちかれと雪にさかすいぬあまのす

二三

すまぬとていふは、一終ひぬ、いふものもあはれぬ、いふはけ
 らにや、一からぬか、あといひはせ終ひる、世々の勅撰、いふんえ
 たれは、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 思ふ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 らに大師、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 仰き、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 正の、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 あな、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 の、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ

まづといふは、

あつちの、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 は、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ

たの、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 住、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ

か、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 かく、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 住、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ
 あ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけらぬ、いふはけ

續

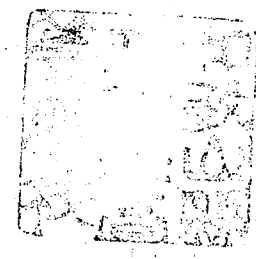
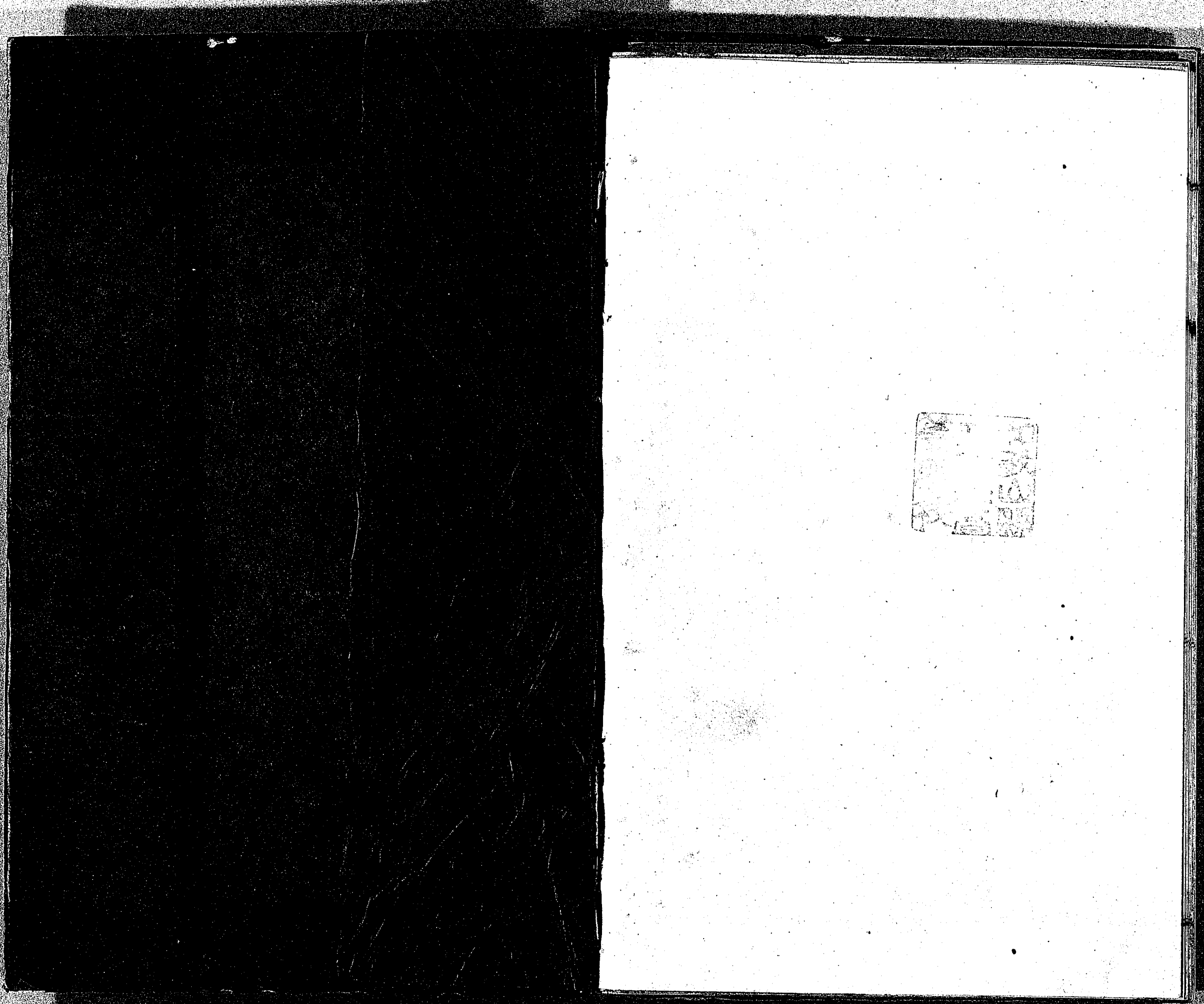
この總整理には昭和十四年九月大阪府立図書館蔵書の
 傳寫本を傳へてうつしたものである、それには字名の姓名も振り
 した時の手跡も書いてある、何だかお足らない感じがするで
 ないか
 調べてみると、同館の圖書目録録には川井立齋記とあるが
 「大阪府人物誌」などを傳へて見たが、ない、川井立齋と云う歌人
 の事蹟を同書に載せてゐた、或はその縁故のものかも知れぬと
 思ふ、
 最後「大日本人名辞書」と探して見たら、果して

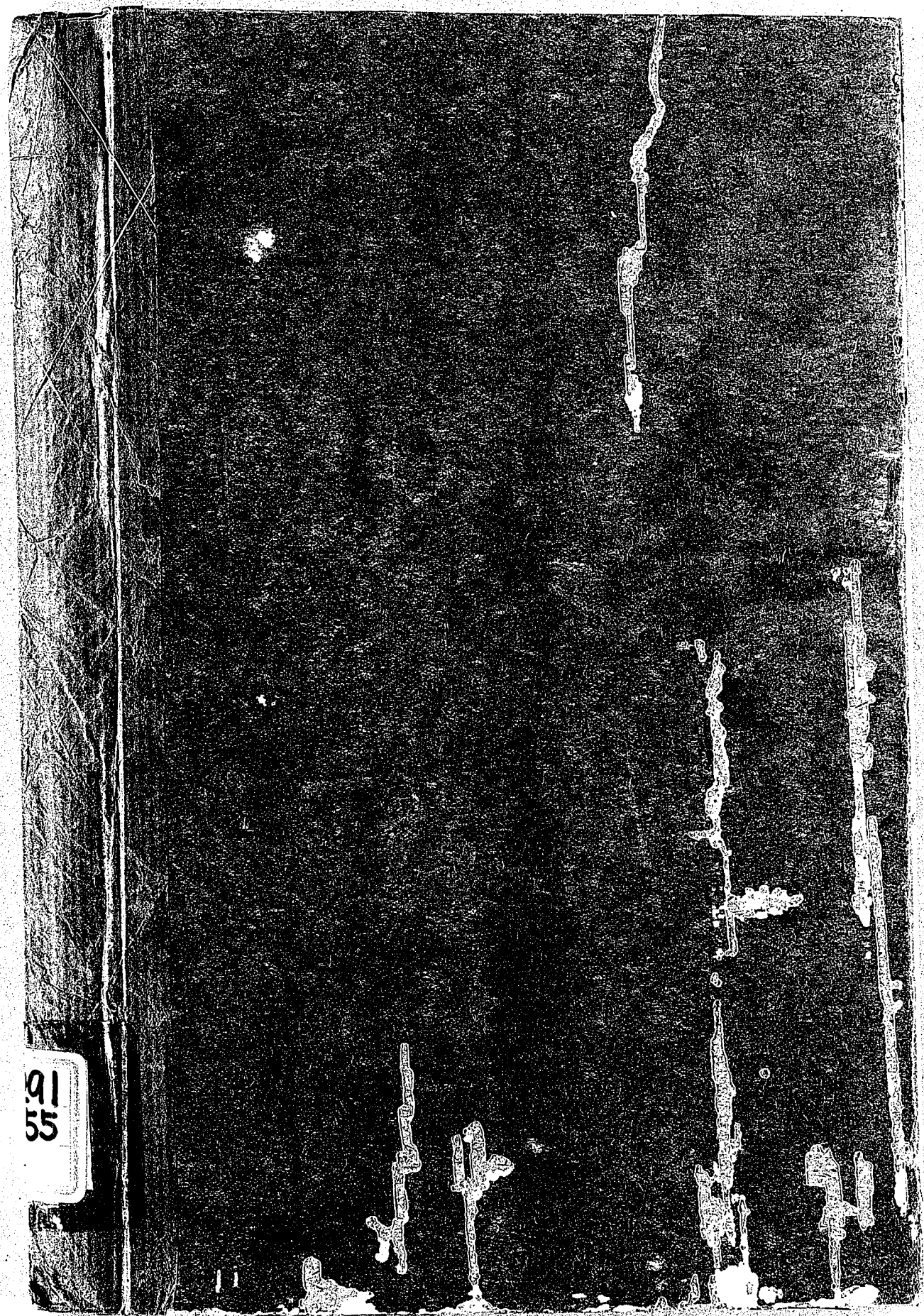
何井主牧、歌人あり。浪花の人有賀長作に學びて和歌を
善くす。家集あり。桂山集より。明和三年七月七日歿す。
年五十九。男三上。尚和歌を善くす。

川井不園子
子云云

Handwritten text in a cursive script, likely a form or document, written on lined paper. The text is organized into several horizontal lines, with some lines containing multiple columns of writing. The script is dense and appears to be a mix of letters and symbols, possibly a shorthand or a specific dialect.

(續中十書)





91
55